論文

金鴻亮の愛国啓蒙運動と安岳事件

佐　藤　飛　文

1．はじめに

筆者は2006年から7年間,『明治学院150年史』の編集委員として,明治学院の朝鮮半島出身留学生の調査に携わった。調査を通して明らかになったことは，韓国併合前後に明治学院で学んだ朝鮮人留学生の中には，李光洙や金東仁，朱耀翰といった朝鮮近代文学史に大きな足跡を残した人物がいるのみならず，愛国啓蒙運動や三・一独立運動に参加した人物が少なからずいたことである。特に朝鮮半島の西北地方（平安南北道・黄海道・咸鏡南北道）出身者を中心に結成された留学生団体の太極学会には，第2代会長の金洛泳をはじめ，金鴻亮，金鉉軾，金観鎬，金壽哲，劉泰魯，文一平，朴相洛，朴永魯，崔在源，李光洙，李始馥，李相晋，李寅彰，李圭延ら多くの明治学院留学生が参加しており，月刊誌『太極学報』の発行による言論啓蒙活動や諸集会の開催，国債報償運動への参加などを通して，朝鮮の国権回復を目指す愛国啓蒙運動を牽引した。明治学院は朝鮮独立運動の拠点の一つとなっていたのである。

本稿で取り上げる金鴻亮は，明治学院普通学部在学中から太極学会や

大韓興学会といった留学生団体の幹部をつとめ，故郷の黄海道安岳郡に初等教育機関の楊山学校と中等教育機関の楊山中学校を設立し，秘密結社である新民会の一員として国権回復と教育による救国を目指して愛国啓蒙運動に投身し，寺内正毅朝鮮総督の暗殺を企てた安岳事件に共謀したかどで逮捕・投獄された独立運動家である。祖国である朝鮮が日本の保護国となり，さらに植民地となってしまった時期に，金鴻亮はどのような働きをし，どのような役割を果たしたのか，検証したい。

2．安岳での出生と成長

金鴻亮は1885年9月20日に黄海道安岳郡安岳邑で生まれた。当時の安岳の様子について，歴史小説家の柳周鉉は『小説 朝鮮総督府』の中で次のように描写している。

> 当時の安岳は，黄海道の教育と文化運動はもちろん，民族独立運動の中心地として，小平壌と呼ばれるほどに注目された地方の町であった。檀君の神話の遺跡が伝わる九月山，九十九の連峰が，東北を囲んで楊山台に連なる落ち着いた地方都市。東南へゆるやかな斜面は肥えた田畑を形成し，これを一里ほどくだれば，韓国第二の戴寧平野が広がる。日の出が，はるかな地平線上にみられる広い平地である。
>
> 戴寧江の支流に沿って，千石，万石の富豪が大屋敷を構えて勢力を張っているかたわら，文化民族運動を盛り上げるために財を喜捨する，いわば総督府にとっては有難くない特別不穏地帯のひとつであった。(1)

そのような「特別不穏地帯」の「富豪の大屋敷」で生まれ育ったのが金鴻亮であった。父の金庸寛は早世し，金鴻亮は祖父の金孝英のもとで育てられた。

金孝英は安岳の「三大富豪」と呼ばれた一人で，貧しい家の出身だったが，綿布を売り歩いて行商をし，土地を購入して開墾し，貸金業も営んで財産を蓄えたという[(2)]。安岳の楊山学校で教師をしていた金九は，金孝英について次のように書いている。

> わたしはここで，金孝英先生のことにふれておかないわけにはいかない。先生は，金庸震の父親で，金鴻亮の祖父に当たられるかただ。若いころには書を学んだが，家の貧しいのを歎き，黄海道所産の綿布を買い入れて，みずから背に負い，平安道の江界，楚山などの山間地を行商して元手を貯え，勤倹貯蓄して富をなしたかただとのことだった。わたしが教師になって行ったころにはもう70歳を越し，腰はフ(キヨク)の字[(3)]ほども曲がっておられたが，気骨は壮大だし，容貌は脱俗の風格があり，見るからに威厳があった。先生は，早くから新教育の必要なことに気づいておられ，それでその長孫の鴻亮を日本に遊学させたのだった。[(4)]

黄海道は長老派のプロテスタント教会が発展した地域であり，安岳には1889年にアメリカ人宣教師のグラハム・リー（Graham Lee）が巡廻伝道に来たのを機に，1894年に安岳邑教会が設立された[(5)]。米国北長老会の宣教師クンス（E. W. Koons）が牧会するこの教会におじの金庸済が熱心に通って信徒となり，金鴻亮も信仰を持つようになった。1902年には安岳邑教会に安新小学校が設置され，おいの金善亮らが通った[(6)]。金鴻亮はこの安新小学校には通っていなかったようだが，おそらく祖父の勧めとクンス宣教師の紹介で長老派の明治学院に留学したものと思われる。

3．明治学院へ入学

金鴻亮が日本に留学した1904年は，韓国では「旧韓末」と呼ばれる

大韓帝国 (1897 ～ 1910 年）末期であった。1904 年に日露戦争がはじまると，日本政府は韓国内に軍を進め，日韓議定書を強要し，戦争遂行に必要な土地を収用するなど，軍事行動の自由を獲得した。さらに日本政府の推薦する財政顧問と外交顧問を韓国政府に送りこむ第 1 次日韓協約を認めさせた。

日本政府はさらに 1905 年, 第 2 次日韓協約（保護条約）を強要した。この協約によって，日本政府は大韓帝国の外交権をうばい，内政・外交に大きな権限をもつ統監府を漢城（現ソウル）におき，保護国とした。初代統監には条約交渉の中心人物であった伊藤博文が就任した。

日露戦争中，韓国皇室は留学生 50 名を特派し，東京府立第一中学校に入学させた。宗教団体や学会，個人による私費留学生もあって，留学生の人数は大幅に増えた。

1905 年に宣教師の紹介で日本に留学し，1907 年に明治学院普通学部に編入した文一平によると，「当時の韓国人留学生の数は，全国ではわからないが，東京だけでも数百余名に達し，語学準備のための専門学校に入学するものが多く，中学校に入学する人は稀だった。官費生は第一中学校に多く集まっており，私費生は明治学院中学部に特に集中していた [(7)]」そうである。金鴻亮もおそらく他の私費留学生と同じように専門学校で日本語を学んでから，1906 年に明治学院普通学部（5 年制）の 3 年に入学した。同学年には朴永魯，金鉉軾，劉泰魯らがおり，一年後輩には李寶鏡（李光洙），文一平，金洛泳，李寅彰，鄭世胤らがいた。

岡村淑美の東アジア圏留学生調査によると，1905 年に明治学院普通学部に入学した韓国人留学生は 2 名，1906 年は 7 名，1907 年は 10 名，1908 年は 15 名，1909 年は 13 名となっている [(8)]。白南薫が明治学院に入学した 1909 年当時には，韓国人留学生が 40 名ほどになっていたという [(9)]。

明治学院普通学部に入学する韓国人留学生が増加したことを受けて，

金鴻亮は明治学院の井深梶之助総理と熊野雄七幹事らと交渉して，新入生の語学準備のため，学院内に語学科を臨時特設することになった[10]。語学科では李光洙が日本語と英語を担当，金鴻亮が算術を担当，日本人教師の佐久切と新井無二郎が日本語を教えていた[11]。日本語が苦手な学生のための補習授業のようなものであったと思われるが，韓国人留学生のために日本語教育まで施すといった配慮が，明治学院で学ぶ韓国人留学生をさらに増加させる契機となったはずである。

黄海道殷栗郡出身の白南薫は，同じ地方のキリスト者として親しかった金鴻亮に日本留学の相談をしたところ，金鴻亮から学費の援助を受けることになり，1909年4月17日に金鴻亮と共にソウルから東京へ向かった。東京に着いた翌日，白南薫は金鴻亮と李寅彰，金洛泳と一緒に明治学院へ行き，3人が白を普通学部の2年生に編入させてくれと要請し，熊野雄七と宮地謙吉による入学試験がおこなわれた。日本語もあまり話せず，英語もほとんどできなかったそうだが，金鴻亮らが「人格も良く漢文の素養があり，才幹もあるので入学さえすれば付いてゆけます」「私たちが責任を持ちます」と念を押してくれたので，入学が許可されたという[12]。

明治学院には金鴻亮の他にも李始馥や李相晋，崔在源など安岳出身の留学生たちが学んだが，彼らもおそらく金鴻亮の支援と紹介で明治学院に入学したものと思われる。『大韓興学報』には，「其間帰国していた金鴻亮氏が今番渡来時に新学生三人を同伴するとのこと[13]」という記事もある。金鴻亮は日本への留学を志す黄海道出身の青年たちを明治学院に斡旋する役割を担っていたのである。

4．太極学会での留学生運動

1905年9月15日に西北地方出身の留学生が中心となって太極学会が

設立された。本郷区元町2丁目66番地に事務所をおいた太極学会は，日勝館という同郷の留学生のための下宿も経営していた。東京高等師範学校で数理を学んでいた張膺震が会長となり，明治大学などで聴講生をしていた崔光玉が総務員をつとめていた。1906年8月（太極学報第1号創刊時）の会員数は49名だったが[14]，次第に会員は増え，平安南道の永柔郡や成川郡，平安北道の龍義地区（龍川郡と義州郡），慶尚南道の東萊府，咸鏡南道の永興郡などに支会が設立され，それらの支会も含めると会員数は600名以上となった。

金鴻亮は太極学会の発起人の一人であった。崔光玉が病のために帰国する際には金鴻亮が同伴して帰国し[15]，李尚根が疥癬症で緊急入院した際にはその治療費を金鴻亮が負担する[16]など，会員たちの支援・援助にも積極的であった。1908年3月に金洛泳が太極学会の会長に就任すると，金鴻亮は総務員となって会を支えた。

太極学会は太極学校という講習所を開設し，駐日韓国公使館参事官兼留学生監督の韓致愈が校長をつとめ，東大生の尚灝や東京高師生の張膺震，順天中学生の朴容善，日本人講師の藤井孝吉らが日本語をはじめとする教科を教えていた。1906年9月の生徒数は20名ほどで[17]，文一平や金洛泳は太極学校で日本語を学んでから明治学院普通学部に編入した[18]。太極学校は光武学校と同寅義塾と合同して，1907年9月に青年学院が設立された[19]。

1906年8月には太極学会の機関誌『太極学報』を創刊し，1908年11月までに合計26冊が刊行された。金鴻亮や金洛泳，文一平，金志侃，金鎮初，張啓澤，金寿哲，楊致中，金源極らが編集員をつとめた。機関誌の発行費用は，会費や機関誌販売代金，有志の寄付などによって調達されたが，金鴻亮は太極学報の拡張のためにたびたび義援金を寄付している[20]。最初は留学生を中心に配布されていたが，1906年11月からは京城の朱翰榮書舗に出版支店を設置し，12月にはサンフランシスコ

の韓人共立新報社にも配布所が設置された。1907年からは平安北道と平安南道にも販売所を設置し，朝鮮各地の学校にも雑誌を発送した。1000部ほどだった発行部数は2000部まで増えた。

太極学会の会員であり，太極学報にもしばしば投稿していた李光洙は次のように書いている。

> その当時，東京には太極学会という留学生団体があった。留学生団体とはいっても一種の愛国的な政党で，その会合で，国家の運命と時局に対する対策を討論した。当時ここが出した《太極学報》は，韓国では屈指の愛国的政治的な雑誌であった。[21]

会員数が増え，機関誌の読者も増えるに従って，太極学報は会員交流と親睦のための雑誌から「愛国的政治的な雑誌」へと性格を変えて行った。太極学会会長の張膺震が教育者となることを志して東京高等師範学校で学んでいたこともあり，太極学報には国家の危機を教育の力で救おうとする教育救国運動の記事が多く見られる。太極学報第3号で張膺震は「我が国の国民教育の振興策」として⑴一般国民に義務教育制度を施行すること，⑵新式の学校を広く設置すること，⑶師範学校を設置し善良な教師を養成すること，⑷外国語学校を合併統一すること，⑸外国へ留学生を多数派遣すること，を提案している[22]。また，金鴻亮が第25号に寄稿した「勧学論」は，福沢諭吉の『学問のすゝめ』を要約したもので，「西哲有言曰，天は人の上に人を造らず，人の下に人を造らず…」と有名な序言を紹介する形ではじまっている[23]。

金鴻亮は1908年4月発行の太極学報第20号に巻頭文「至誠の力」を寄稿している。その一部を要約すると次のような内容である（筆者私訳）。

今日吾人が賛美し敬拝する英雄傑士はみな至誠の産物であり，彼らの活動もまた至誠の活動である。彼らの胸中に至誠の燈火がはげしく燃えており，あらゆる障害や困難を乗り越えて栄光の座にたどりつくことができる。至誠の人は地上で最大の活動物であり，最大の栄光物であり，最大の神聖物だと言える。ワシントンは農夫の出身で独立軍の総督となり自民族を奴隷の中から救い出した。マルティンルターは草夫の家柄で生長し，天権を掌握していたローマ法王から破門されながらも，新教をつくり現代社会を一変させた。彼らに至誠の力がなかったならば，このような偉業をなすことはできなかった。

ああ，保護国となってしまった人民たちよ。汝を復する方策と汝を豊かにする方略は何か。汝を復する教育は至誠の教育であり，汝を復する政治軍術は至誠家の政治軍術であり，汝を豊かにする事業も至誠を遠大に図る者の事業である。至誠は吾人の生命であり救世主である。至誠は天に通じる。至誠を基礎としてその上に理想の楼閣を立てるのならば，嵐にも耐えることができ，太極旗の下で落成を祝う宴で，我らの自由と我らの幸福は無限となるのだ。(24)

金鴻亮はこの文章を書いた翌年，「至誠」の実践のために日本留学を中断して帰国し，教育者・実業家となる道を選んだ。

韓国人留学生の間では太極学会の他にも，共修学会，光武学会，洛東親睦会，同寅学会，湖南学会，大韓留学生会などの団体が作られた。これらの留学生団体は，出身地域または官費留学生・私費留学生によって別々に組織されていたが，愛国啓蒙運動の高まりを受けて，大同団結して連合団体を組織しようという動きが推進された。その結果，1909年1月に留学生団体を統合して大韓興学会が結成された。金鴻亮は大韓興学会でも評議員や総務，出版部員などをつとめた(25)。

太極學報

第二十號

隆熙二年四月二十四日
明治四十一年四月廿四日
〔發行〕

論壇

至誠의力

金鴻亮

嗚呼라彼天壤間에國의興亡과人의生死가接踵相連ㅎ야於國於箇人에其經營行動이無非大成功大勝利를目的ㅎ고此를貫徹ㅎ에孜々汲々ㅎ을而已니噫彼目的이여吾人々類는其性質을解ㅋ不能ㅎ者라도言念이此에一到ㅎ면不期의滿足과空前의希望이心頭에舞到ㅎ야生活의趣味를一加ㅎ며未來의榮光을自約케ㅎ는도다雖然이나自古로此를能히貫徹ㅎ者는其數가甚稀ㅎ나니吾人類가萬物의靈長이라自許自誇ㅎ는物이되여其希望의目的을達ㅋ如此히至難ㅎ은實노搏案一憤과掩面自愧를自抑ㅋ不能로다果然吾人의品性」에如何ㅎ缺點이有ㅎ야然ㅎ인지明確ㅎ理論과的實ㅎ據驗을不由ㅎ면到底히安心을與ㅋ不能ㅎ지라古今에此를能達能成ㅎ者의品性을考察ㅎ면其

資料１：『太極学報』第 20 号

5．安昌浩との出会い

太極学会では頻繁に例会と演説会を開いていた。その演説会で金鴻亮が出会ったのが島山・安昌浩であった。

1878年11月9日に平安南道江西郡で生まれた安昌浩は，米国長老派宣教会のアンダーウッド（H. G. Underwood）が設立した救世学堂（のちの儆新学校）で学ぶうちに信仰を持ち，キリスト者となった。1896年に徐載弼らが朝鮮の自主独立と自由民権のために独立協会を結成すると，安昌浩も独立協会に加入して関西（平安道）支部を設立，各地を巡回しながら啓蒙演説をおこなった。独立協会解散後は帰郷して信徒伝道師として宣教活動をおこない，江西郡の灘浦里教会と青山浦教会の設立に尽力した[26]。1902年にミラー（F. S. Miller）宣教師の斡旋で神学と教育学を学ぶために渡米し，1904年にサンフランシスコで共立協会を結成して『共立新報』を創刊した。

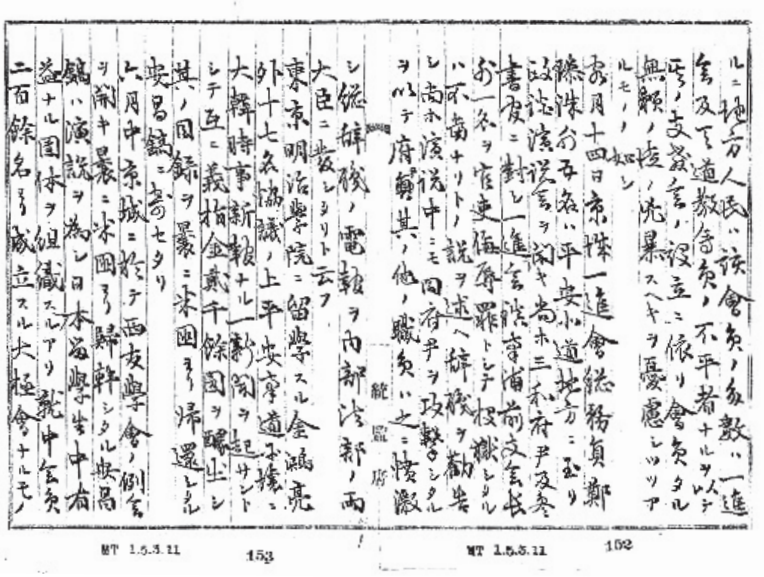
保護条約締結を知った安昌浩は，国権回復のための愛国啓蒙運動を展開するために1907年に東京経由で帰国した。東京では亡命中の愈吉濬・朴泳孝らを訪問し，2月3日に太極学会の特別集会で演説をおこなった。安昌浩は雄弁家として知られていた。

> 彼が同胞にアピールする趣旨は一貫していた。それは即ち，現今の世界は民族が相争う時代であり，独立国家でなくしては民族が存立し得ず，また個人も存在し得ないということで，国民各自が覚醒して大きな力を発揮しないことには祖国の独立を維持できないということであった。その偉大な力を発揮する道はまず国民である各個人が発奮して修養を積み，道徳的に偽りのない真実な人格者となり，知識的にも技術的にも有能な人材となり，更にそのような個人の集合体が，国家千年の大計のために堅固な団結を結ばなければならない，というものであった。[27]

集会で安昌浩の演説を聞いた85名の韓国人留学生たちは大きな感銘を受けた。『太極学報』には次のように報告されている。

> 雄壮な弁説と一種熱誠な情感を含む舌鋒で数千言を滔々と説往接来し，聞く者は悲壮な語勢に至ると悲観に暮れ自ずと不覚にも熱い涙を流す者多く，激烈な節に達すると万丈気虹が岩のごとく碧霄となった。(28)

安昌浩はこの演説会後に帰国するが，5月に再来日すると，太極学会は再び安昌浩の歓迎会を開き，内国視察状況の報告を聞いた。1907年7月31日作成の統監府の政況報告並雑報には，金鴻亮らが平安南道で新聞を発行するために義援金を集めて安昌浩に託したという記事がある。



資料2：JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B03041513800（第7画像目）

東京明治学院ニ留学スル金鴻亮外十七名協議ノ上，平安南道平壌ニ大韓時事新報ナル一新聞ヲ起サントシテ互ニ義捐金二千余円ヲ醵出し，其ノ目録ヲ曩ニ米国ヨリ帰還シタル安昌鎬ニ寄セタリ。

六月中，京城ニ於テ西友学会ノ例会ヲ開キ，曩ニ米国ヨリ帰韓シタル安昌鎬ハ演説ヲ為シ，日本留学生中，有益ナル団体ヲ組織スルアリ。就中会員二百余名ヨリ成立スル太極会ナルモノアリテ，専ラ韓国ノ教育及国事問題ヲ研究シツツアリ。会員中ニハ平壌地方ニ於テ日刊新聞ノ発刊ナキヲ概シ，同地方出身ノ学生ハ協力以テ学資ノ半分ヲ割キ，他日此ノ挙アルニ際シ補助セント，既ニ金員ヲ醵集シタリト云フ。身海外ニ在ル一介ノ学生ニシテ，国事ヲ憂フル斯ノ如シ。吾人内地ニ在ル者，洵ニ慚愧ニ堪ヘズ，仍テ吾会員ハ，今後新聞発刊ノ計画ニ尽力ヲ望ム旨ヲ述ベタリ。(29)

太極学会は安昌浩を介してソウルの西友学会やサンフランシスコの共立協会とも連携して言論啓蒙活動や国債報償運動（日本からの借款を募金によって返済しようとする運動）を展開した。金鴻亮は安昌浩らが結成した秘密結社の新民会にも加入し，留学先である東京と故郷の安岳を往来しながら，愛国啓蒙運動に情熱を注いで行った。

6．愛国啓蒙運動と安岳勉学会

第2次日韓協約による強引な保護国化に対し，韓国国内では憤激の声が高まっていた。韓国皇帝の高宗は1907年にオランダのハーグで開かれた第2回万国平和会議に特使を送って，第2次日韓協約の不法を訴えたが，日本の働きかけもあって列国はこれを無視した。伊藤統監は，このハーグ特使事件を利用して皇帝を退位させ，内政の実権をうばう第3次日韓協約を強要し，韓国軍隊を解散させた。韓国内では解散させられた軍隊が抗日闘争に加わり，日本の侵略に武力で抵抗する義兵運動が

全国的に広まった。また，都市の知識人や学生，商工業者らは，言論や出版，教育や殖産興業などによって愛国心を高揚させ，国権回復のための実力養成をはかる愛国啓蒙運動をおこした。

愛国啓蒙運動は1906年4月の大韓自強会の結成によって本格的に開始された。「教育の拡張と産業の発達を研究実施することにより自国の富強を計図し，独立の基礎を作ること[30]」を目的とし，教育振興と産業発展を基本綱領とした。独立協会前会長であり韓英書院長であった尹致昊が会長となり，漢城に本部をおき，各地に支会を設けて全国的規模の団体に発展した。1907年に大韓自強会が皇帝高宗の強制退位に反対する国民運動を繰り広げると，保安法違反により解散させられたが，後継団体として大韓協会が結成され，啓蒙活動を継続した。

地方別の啓蒙・教育団体も結成された。1906年に黄海道出身の朴殷植らが西友学会を創立すると，咸鏡道出身の李儁らが関北興学会を設立した。両学会は安昌浩や李甲らの手によって1908年1月に合同して西北学会となり，機関誌『西北学会月報』を発行し，巡回講演会を開いて民衆の啓蒙につとめた。これに影響を受けて，湖南学会（全羅道）や畿湖興学会（京畿道・忠清道），嶠南教育会（慶尚道），関東学会（江原道）などが各地で結成された。これらの教育団体は新教育のための私立学校を各地に創設し，またそのための教師養成教育に従事した。

安岳地方は，黄海道における愛国啓蒙運動の揺籃地であった。その中心となったのは，崔光玉と金九，金鴻亮らであった。

1877年8月15日に平安南道中和郡で生まれた崔光玉は，1900年に米国の北長老会が平壌に設立した崇実中学の一期生として入学，在学中に信仰を持ちキリスト者になった。1904年に卒業後，1905年に日本へ留学，正則学校で英語と数理を学び，聴講生として東京高等師範学校や明治大学に通いながら，太極学会の総務員として活動に尽力し，太極学校の設立を主導した[31]。クリスマスには留学生たちを明治学院に集め

て祝会を開き[32]，1906年6月24日には東京基督教青年会で韓国人留学生歓迎会を開くなど，YMCAの活動にも尽力した[33]。しかし肺結核を患い，1906年7月16日に金鴻亮らに伴われて帰国し，療養のために安岳の燃燈寺に長期滞在した。

1906年10月に朴殷植らが西友学会を設立すると，崔光玉も安昌浩らとともに加入した。さらに崔光玉は1906年12月に金鴻亮らと共に安岳勉学会を組織した。勉学会の目的は，「①青年たちを啓蒙し民族自立思想を鼓吹し，②教育を奨励し多くの学校を建て，教師を養成し，③農事技術を改良し工業を奨励し産業振興をはかること[34]」であった。会長には安岳邑教会付属の安新学校で教師をしていた林澤権が選出された。

安岳勉学会は勉学書舗という出版社兼書籍販売店を作り，崔光玉が日本語書籍を翻訳した『教育学』と，崔光玉が著述した国語教材『大韓文典』を出版した。『大韓文典』は大成学校をはじめとする私立中学校の教科書として使用された。

愛国啓蒙運動により全国各地に新設される学校が増えていったが，教師が慢性的に不足しており，中には不十分な教育しか受けずに教師になるものもいて，教師の養成と研修が求められていた。西友学会は1907年1月に朴殷植を初代校長とする西友師範学校を設立した[35]。さらに西友学会は平壌郡民会と共同して1907年3月に夜間の師範講習所を開校し，崔光玉らが講師を務めた[36]。3か月後の6月12日に師範講習所が卒業生61名を送り出す[37]と，夏季休暇を利用して安岳勉学会でも師範講習会を開くことになった。

1907年7月に安岳勉学会が開いた第1回夏季師範講習会では，小中学校の教師や教職志望者70余名が集まり，20日間の講習がおこなわれ，崔光玉が国語・生理学・物理学・植物学・経済原論などを担当し，高貞華は韓国史を，李光洙は西洋史を教えた。明治学院普通学部の学生だった李光洙は当時17歳で，金鴻亮に請われて師範講習会の講師を

つとめた[38]。1908年と1909年の夏季師範講習会にはそれぞれ300名以上が集まり，明治学院普通学部の金洛泳や李始馥らも講師として参加した[39]。太極学会の初代会長であり，東京高等師範学校卒業後に平壌の大成学校の学監（教務主任）になっていた張膺震も特別講義で安岳を訪れた。夏季師範講習会の盛況ぶりについて，金九は次のように書いている。

> 安岳には，金庸済やそのいとこの金庸震らと，かれらの子や甥にあたる金鴻亮，崔明植らの志士たちがおり，新教育に熱心だった。このころ安岳ばかりでなく各地に学校が多く興されたのだが，新知識をもつ教員が不足していたので，当時教育家として名高かった崔光玉を平壌から礼を尽くして招聘し，安岳の楊山学校で夏季師範講習会を開いたところ，私塾の訓長たちまで講習を受けにきた。なかにはみごとな白髪の老人もいた。遠く京畿道，忠清道からまで人がきて，講習生は四百人余りにも達した。このときの講師は金鴻亮，李始馥，李相晋，韓弼昊，李寶鏡すなわち李光洙，金洛泳，崔在源らで，また女性講師として金楽姫，方信栄らがおり，姜九峰，朴慧明らのような僧も講習生の中に加わっていた。[40]

安岳勉学会は春季連合大運動会も開いた。当時，体育は独立運動の基礎作りとして重視されており，運動会は一般民衆を啓蒙する場でもあった。大運動会には安岳郡をはじめ殷栗郡，載寧郡，信川郡，鳳山郡，長淵郡などの学校代表が安岳に集まり，殷栗郡長連面の光進学校で教師をしていた白南薫も児童を引率して参加した[41]。競技の後には大演説会が開かれ，崔光玉らが熱弁をふるった。尹健次が指摘しているように，大運動会の開催は「教育の成果を誇示し，日本侵略者に朝鮮民族の気概を示す一大デモンストレーション」となり，「尚武的教育を重視する救国教育運動の本質を反映するとともに，被圧迫民族の鬱憤と社会的不満のはけ口ともなった[42]」のである。

7．楊山学校と海西教育総会の設立

1907年に金鴻亮は，祖父の金孝英やおじの金庸済と共に，初等教育機関である楊山学校を安岳に設立した。この楊山学校の教師として招聘されたのが金九であった。

1876年7月11日に黄海道海州府で生まれた金九は，18歳で甲午農民戦争に参加し，1896年に義兵として日本人陸軍中尉を惨殺して投獄されたが，1898年に脱獄し，放浪中に信仰を持ちキリスト者となって帰郷，長淵の教会付属の学校などで教師をしていたが，金庸済の招きで楊山学校の教員となった。

1908年に第2回夏季師範講習会を終えた後，崔光玉は黄海道一帯の教師たちを集め，教師の有機的組織の結成を提案し，海西教育総会が結成された。会の目的は「①黄海道一帯の諸教育機関を有機的に連結する媒体となり，②教育文化普及運動を促進し，③黄海道のすべての面（村）ごとに1つずつ学校を作ること[43]」であった。盧伯林と張義澤が顧問となり，会長には宋鍾昊が，学務総監には金九が選出された。金九は各地で教育講演会を開き，黄海道内の各地に学校を設立するよう働きかけた。白南薫も長連面の学務委員として海西教育総会に参加した[44]。1909年末には国内の自主的私立学校の数は2250校となり，黄海道でも教育救国運動の高まりにより学校新設が相次ぎ，道内の自主的私立学校の数は286校となった[45]。明治学院を卒業後に帰国して私立学校の教師になる者も相次いだ。（資料3参照）

各地で初等学校が作られると，中等教育機関である中学校の設立が求められた。そこで金鴻亮が校長となり，安岳に楊山中学校を1908年10月に開校した（認可は1909年）。開校時の生徒数は約60名で，金鴻亮の明治学院での後輩である李始馥や李相晋らが教師をつとめた[46]。楊

資料３　私立学校に奉職した明治学院普通学部出身者

設立年	学校名	所在地	設立者	明治学院出身者
1886	儆新学校	ソウル	アンダーウッド（H. G. Underwood）	文一平
1896	明新学校	戴寧	ハント（W. B. Hunt）	金洛泳
1897	崇実学校	平壤	ベアード（W. M. Baird）	鄭斗鉉
1905	光進学校	長連	長老派	白南薫
1906	養實学校	義州	長老派	文一平
1907	大成学校	平壤	安昌浩	金鉉軾，文一平
1907	五山学校	定州	李昇薫	李光洙
1907	楊山学校	安岳	金庸済	金鴻亮，崔在源
1909	楊山中学校	安岳	金鴻亮	金鴻亮，李始馥，李相晋
1910	光武学校	松禾	盧伯麟	金洛泳

山中学校は，平壤の大成学校，定州の五山学校とならんで「西北地区の三大中学校[47]」と称された。

1909年7月には大韓興学会の東京留学生野球団が安岳を訪れ，楊山中学校で交流試合をおこなった。この野球団には，明治学院の金一と李圭延，金瓚永，金観鎬らが参加しており，野球団に同行した李光洙は安岳にとどまり，夏季師範学校の講師をつとめた[48]。金鴻亮は多くの留学生たちを安岳に招き，彼らと交流することを通して愛国啓蒙運動を推

進していった。さらに金鴻亮たちは，鳳山郡の沙里院近郊に新たな中学校をつくり，その周辺に理想的な模範農村を建設しようという計画を立て，準備を始めた[49]。

このような愛国啓蒙運動の高揚に対して，統監府は1907年に保安法と新聞紙法を，1908年に学会令を制定して，言論・出版・集会・結社の自由を弾圧した。また，教科書用図書検定規定を設けて排日的傾向を持つ教科書を取り締まり，私立学校令によって学校教育に対する監督を強化した。宿泊を伴う郡をまたいでの大規模な運動会も禁止され，1909年の春に安岳勉学会が開催を計画していた春季大運動会は中止を余儀なくされた。

8．新民会への加入

大韓協会とともに愛国啓蒙運動の中心となったのが新民会であった。新民会は1907年に安昌浩らによって結成された秘密結社である。尹致昊が会長となり，安昌浩が副会長となった。『大韓毎日新報』の梁起鐸や申采浩といった言論人や，李東輝・李甲・柳東説・盧伯麟といった青年将校，実業家で五山学校の創設者でもある李昇薫，協同社社長の安泰国，尚洞教会牧師で攻玉学校校長の全徳基，尚洞青年会幹部で青年学院の教師であった李東寧，崇徳学校と大成学校の教師をしていた金東元，安岳勉学会の崔光玉や金九など，多彩な人材が集まった。

新民会の目的は，①国民に民族意識と独立思想を鼓吹する，②同志を見出し，団結して国民運動のための力量を蓄積する，③教育機関を各地に設置して青少年の教育を振興する，④各種商工業機関を作り団体の財政と国力を増進すること，などであった。

新民会は秘密結社として各道に一人ずつの責任者がいた。その下に郡責任者がいて，縦で連絡を取り，横では互いに同志が誰だかわからない

ようになっていた。入会手続きは厳重で「信じられる人」「愛国献身する決意のある人」「団結の信義に服従する人」などの資格で人物を選び入会させた[50]。

朝鮮総督府警務総監部の警視として安岳事件と新民会105人事件の捜査を担当した国友尚謙は次のように報告している。

> 朝鮮ニ於ケル新民会ノ最モ盛大ナルハ，黄海，平安，咸鏡南北五道ニシテ，之ニ次グヲ京畿，全羅，慶尚南北道トス。就中平安南道最モ盛ンナリ。之レ該地出身ノ安昌浩，崔光玉等ガ全力ヲ尽クシタルニ基因ス。張膺震ノ言ニ依レバ，平安南道ノ現在会員三万六千ヲ超ユト云フ。以テ其根底ノ深キヲ知ルベシ。
>
> 会員ハ土地ノ富豪，名望者，或ハ学生ノ間ニ募リ，首領等互ニ気脈ヲ通ジテ其選択ニハ頗ル細心ノ注意ヲ払ヒ，容易ニ入会ヲ許容セズ。各首領ハ常ニ会員ノ募集ニ注意シ，会員ノ推薦アルモ長キハ年餘，短キモ数月間其行動ヲ看守シ，意思ノ堅固ヲ認ムルニアラズンバ入会セシメズ。[51]

尹慶老によると，西北地方で新民会の組織を最初に始めた人物は崔光玉であった。1907年3月に安昌浩が西北地方で巡廻講演会をしていた時に，安昌浩は崔光玉と接触し，崔光玉に平安南道と黄海道の新民会組織の責任を任せたようである[52]。崔光玉は安岳勉学会や海西教育総会を組織して黄海道地域を中心に教育運動を展開しながら，ソウルの儆新学校や義州の養實学校などでも教鞭をとり，皇城キリスト教青年会の幹事もつとめていた。[53]

その後，黄海道の総責任者は金九に，平安南道の総責任者は安泰国に委ねられ，1909年8月からは張膺震が平安南道の総責任者となった[54]。黄海道地域では，金鴻亮，崔明植，呉宅儀，片康烈，都寅権らが会員となった[55]。金鴻亮がいつ新民会に入会したかは不明であるが，金鴻亮が1909年に宣川の信聖中学校の体操教師であった申孝範を会員に推薦

している[56]ことから，明治学院在学中にすでに会員となっていたと推測される。

新民会は秘密結社であったので，正確な会員数を知ることはできないが，諸文献から判断してほぼ800名程度だと思われる[57]。明治学院の出身者としては金鴻亮の他に李相晋と文一平が新民会の会員であった[58]。

新民会は西北地方を基盤として啓蒙講演，教育，出版，産業育成，青年運動など多様な活動を展開した。

安昌浩は新民会の最重要事業である独立運動に献身する人材と，国民教育の指標となる人物の養成を目的として，1908年に大成学校を平壌に設立した。尹致昊が初代校長となり，張膺震が学監として校務を主管した。明治学院を卒業した金鉉軾と文一平も大成学校で教鞭をとっている[59]。安昌浩は校長代理という地位であったが，自ら教壇にも立ち，「嘘偽で衰退した国力を回復する道はただ誠実であることのみである。学生諸君は万人の信頼を得られる人になることで，我が国民が世界に信頼される民族となるようにせよ，この外に我が国を更生させる道はない[60]」と説いた。

安昌浩は出版事業も重視した。「書店も学校であり，本は教師である。書店はより厳格な学校となり，書物はより畏敬すべき教師である[61]」という見地から，愛国啓蒙のための出版物普及と教科書発行のために大極書館を平壌とソウルと大邱に設立した。実業家の李昇薫が館主となり，安泰国や李徳煥が運営にあたった。

また，日本企業による市場独占に対抗して1908年に平壌馬山洞に磁器会社を設立し，これも李昌薫が社長となり，株主を募って資本を集め，産業振興にも努力した。

さらに安昌浩は，新民会の姉妹機関として，青年運動団体である青年学友会を1909年に結成した。尹致昊，張膺震，崔南善，崔光玉，車利錫（大成学校教師），安泰国，蔡弼近，李昇薫，李東寧，金道熙（儆新

中学校教師)，朴重華(普成中学校校長)，全徳基の12名が発起人となり，会長に朴重華，総務に李東寧，書記に申伯雨，議事に李会寧，崔南善，金佐鎮，尹琦燮，張道準らが任命された[62]。

崔南善が1908年11月に創刊した月刊雑誌『少年』は，青年学友会の機関誌となった。日本留学中から崔南善と親しかった李光洙は，『少年』誌に詩「熊」「大同江」，評論「余の自覚した人生」，短編「幼き犠牲」「献身者」などを投稿している。

「言行が大変清廉潔白なクリスチャンで愛国の志士」であり「青年学友会の人格者の模範[63]」として安昌浩に期待されていたのが崔光玉であった。崔光玉は1909年8月に養實学校の校長に就任したが，黄海道白川郡の夏期講習所で教えている時に病が悪化して体調を崩し，1910年7月19日に死去した[64]。

金鴻亮は1909年3月に明治学院普通学部を卒業後，牛込区の公武館に下宿しながら早稲田大学予科で政治経済を学びはじめた。しかし「今度の夏休みに帰国したら，平素から考えていたことを実践するために東京には戻ってこないつもりである」と白南薫に告げて帰国した。金鴻亮が「平素から考えていたこと」とは，「我々が独立するためには実力を養成しなければならず，それをするには国内では出来ないのでロシア領方面に行き軍官養成機関をつくること」であった[65]。

9．安岳事件と新民会105人事件

黄海道海州府出身の愛国啓蒙運動家であり，義兵中将でもあった安重根が1909年10月26日にハルビン駅で伊藤博文を射殺する事件を起こすと，新民会の安昌浩・李甲・崔炳憲・李鐘浩らが重要参考人として拘束された。さらに平安北道宣川郡出身の李在明が1909年12月22日に李完用首相暗殺未遂事件を起こすと，安泰国と林蚩正らも拘束された。

安昌浩は釈放後米国に亡命し，李鍾浩・李甲・柳東説・申采浩らも国外に脱出した。

1910年8月，日本政府は韓国政府に併合条約をおしつけて植民地とした。そして韓国を朝鮮，漢城を京城と改称して，朝鮮総督府を設置した。陸軍大臣兼第3代統監の寺内正毅が初代朝鮮総督に任命された。総督は現役の陸海軍大将に限られ，陸海軍を統率し，法律に代わる制令を発布できるなど，大きな力を持った。憲兵と警察の任務を兼任する憲兵警察制度を設け，朝鮮語の新聞・雑誌の発行や集会・結社を厳しく制限するなど，武断政治を実施した。

1910 年11月，梁起鐸は秘密会議を招集して国内に残留している新民会の幹部を集めた。金九によると，会議には梁起鐸，李東寧，安泰国，朱鎮洙，李昌薫，金道熙，金九の7名が参加し，次のことを決定した。

> 倭がソウルに総督府を置いたのに対抗して，われわれもソウルに都督府をおき，各道に総監という代表をおき，国脈を維持して国を治めるようにする。満州への移民計画を立て，また武官学校を創設して光復戦争（独立戦争）に役だつ将校を養成する。そして，各道代表を選任し，黄海道は金亀（金九），平安南道は安泰国，平安北道は李昇薫，江原道は朱鎮洙，京畿道は梁起鐸とした。そしてこれらの代表は，急ぎ任地に帰り，黄海・平南・平北はそれぞれ十五万円，江原道は十万円，京畿道は二十万円を，十五日以内に調達することに決まった。(66)

会議を終えて安岳に帰った金九は，この秘密会議で決定されたことを金鴻亮に打ち明け，金鴻亮はその計画を実行すべく，家財の整理をはじめた。

そのような中で安岳を訪れたのが安明根であった。安明根は安重根の従弟であり，寺内総督を暗殺して反日蜂起を起こすための資金を黄海道の富豪や日本人居留民から強奪することを計画していた。金九はその計

画を放棄するよう勧め，「国家の独立はそのように一時的に恨みを晴らすだけでできることではないのだから，広く同志を集め，同胞を教え導いて実力を養ってから大きく戦うために，準備をしなければならないのだ[(67)]」と説得したという。

しかし1910年12月に安明根が逮捕されると，逮捕時に拳銃を所持していたため，警務総監部はこの事件を寺内総督暗殺陰謀事件に仕立てて，黄海道安岳地方を中心に愛国啓蒙運動をおこなっていた160余名を逮捕した。安明根と共謀して寺内総督の暗殺を企て，西間島に武官学校を設置して独立運動を準備するために富豪の金を強奪したという容疑であった。取り調べでは厳しい拷問と自白の強要がなされ，虚偽の自白を拒んだ韓弼昊は獄死した。

裁判は「安明根強盗事件」と「梁起鐸保安法違反事件」の2つにわけておこなわれた。その結果,「安明根強盗事件」では，安明根が終身刑，金鴻亮・金九・韓淳稷・裵敬鎮・李承吉・朴晩俊・元行燮は懲役15年，都寅権・楊星鎮は懲役10年，金庸済・崔明植・金益淵は懲役7年，崔益馨・高奉守・朴亨秉・張倫根・韓貞教は懲役5年が言い渡された。また,「梁起鐸保安法違反事件」では，梁起鐸・安泰国・朱鎮洙・金九・金鴻亮・玉観彬らが懲役2年となり，李昇薫や李東輝らは済州島へ1年間の居住制限（行政処分）となった。明治学院出身で新民会の会員でもあった李相晋も全羅南道の慾智島へ1年間流配された[(68)]。

「安明根強盗事件」の判決書には，金鴻亮の罪状について，次のように書かれている。

被告金鴻亮ハ黄海道ノ資産家ニシテ同ジク旧韓国ニ於ケル帝国勢力ノ排除ニ腐心シ居リタルモノナルガ，明治四十三年八月二十九日旧韓国ノ帝国ニ併合セラルルヤ新政ヲ悦バズ，一日モ朝鮮本土ニ在リテ帝国ノ治下ニ立ツヲ潔トセズ同年十一月中清国移住ヲ企テタルモ事成ラズ，更ニ崔明植ガ清国安東縣ニ於テ商業経営ノ

挙アルヲ聞キ，之ヲ利用シテ同地ニ移住シ巨額ノ資本ヲ以テ問屋業ヲ共同経営シ，其利益ヲ以テ付近荒蕪地ヲ購入シ多数ノ朝鮮人ヲ移住セシメ此等子弟ヲ教育シ機会ニ乗ジ独立戦争ヲ起シ以テ旧韓国ノ国権回復ヲ計ランコトヲ企テ，同年十二月下旬鄭達河ニ対シ右計画ノ下ニ安東縣ニ移住センコトヲ勧誘シ同人外数名ト其出資方ヲ協議シ，尚ホ同月下旬同道信川郡ノ資産家李源植ニ同様勧誘ヲ為シ，被告ハ其資産ノ大部分ヲ売却シテ移住ノ準備ヲ為シ以テ前記目的ノ遂行ニ努メ因テ治安ノ妨害ヲ為シタルモノナリ。(69)

この安岳事件を機に，総督府警務総監部は，新民会を単なる愛国啓蒙団体ではなく，「国外に独立基地を設置し，独立戦争を目標にした武装独立団体」として，また「国内の総督と親日高級官吏を暗殺しようとする秘密暗殺団体」として認識するようになった(70)。

安岳事件に続き，1911年から1912年にかけて新民会への大弾圧がおこなわれ，600余名が逮捕された。寺内総督が鴨緑江鉄橋竣工式に参列するために平安北道の宣川駅を通過するときに彼を暗殺しようと陰謀をたくらんだという容疑であった。一審で有罪判決を受けたものが105名に達したため，105人事件と呼ばれている。判決材料の多くは拷問による虚偽の自白であった。弁護団によって警察尋問調書の不備が暴露され，米国人宣教師などからの批判も高まって国際問題化したこともあり，二審では105名中99名が無罪釈放となり，尹致昊・梁起鐸・安泰国・李昇薫・林蚩正・玉観彬の6名が首謀者として懲役6年の実刑判決を受けた。服役した6名は1915年に特赦で放免となった。

安岳事件と105人事件によって新民会は自然消滅に至り，楊山学校や大成学校は廃校となった。国友尚謙によると，105人事件で起訴された愛国啓蒙運動家128名中，キリスト教徒は118名であった(71)。105人事件はキリスト教徒への弾圧事件でもあった。

10. 新民会の解体後

安岳事件と105人事件により新民会は解体したが，すでに中国東北部の西間島に渡っていた李東寧や李会栄らは1911年に新興講習所を設立し，朝鮮人青年達への軍事訓練をはじめた[72]。新興講習所は1913年に新興武官学校に改称され，3500余名の独立軍幹部を養成した[73]。また，李東輝は北間島の明東村に移り住み，柳東説らと協力して間島国民会を結成，さらに1914年に羅子溝武官学校を創設し，独立軍養成に情熱を注いだ[74]。新民会が構想した間島での朝鮮独立基地建設運動は，1920年代から活発化した抗日武装独立運動の重要な基礎となった。

1919年に朝鮮で3・1独立運動が起こり，4月10日には上海で大韓民国臨時政府が組織されると，新民会の同志たちが再び上海に結集した。初代内閣の内務総長には安昌浩，軍務総長には李東輝，法務総長には李始栄が選ばれた。9月にはシベリアの大韓国民会議とソウルの漢城政府が合流して統合臨時政府が組織された。統合臨時政府では，李承晩が大統領となったが，李東輝は国務総理，李東寧は内務総長，盧伯麟は軍務総長，李始栄は財務総長，安昌浩は労働局総弁となった。

一方，仮出獄した金九も，金鴻亮・金庸済・金庸震らの援助を受けて上海に亡命した[75]。金九は大韓民国臨時政府の警務局長・内務総長・国務領を歴任し，1928年には韓国独立党を結成，1940年に臨時政府が重慶に移ると韓国光復軍を組織し，1944年には臨時政府主席となった。大韓民国臨時政府は内紛と分裂と合流を繰り返しながら，27年間独立運動を続けた。

11. 安岳事件後の金鴻亮

金鴻亮は「安明根強盗事件」での懲役15年に加えて「梁起鐸保安法違反事件」で懲役2年が課せられ，西大門刑務所で服役したが，減刑されて1915年に仮出獄した。出獄後は郷里の安岳で金農場の拡大経営に尽力した。武断政治から文化政治への転換によって1920年に『東亜日報』や『朝鮮日報』などの朝鮮語の民間新聞の創刊が許可されると，金鴻亮は1925年から1931年まで東亜日報の安岳支局長として同紙の拡販につとめた[76]。1933年に黄海道の道会議員となり，1941年6月からは道会副議長もつとめた。

楊山小中学校は安岳事件によって強制的に閉校させられてしまい，沙里院での中学校建設計画も頓挫してしまったが，金鴻亮は私財を投じて1928年に黄海道信川郡に初等教育機関の東山学院を設立した[77]。さらに金鴻亮は1936年に公立の安岳中学校設立のために10万円を[78]，1938年に安岳高等女学校設立のために15万円を寄付している[79]。安岳中学校は1938年に，安岳高等女学校は1940年に開校した。また，1938年に米国北長老会宣教会が神社参拝拒否により学校経営からの撤退を表明すると，ソウルの儆新学校の経営権が宣教財団から金鴻亮財団へ移譲され，金鴻亮は儆新学校の経営も担当することになった。

このように教育への情熱を注ぎ続けた金鴻亮であったが，「親日派」への転向も見られた。京城地方法院検事局の治安状況報告「要視察人ノ言動」（1938年）には，次のような記事がある。

黄海道安岳邑『政要』　金鴻亮

右者極端ナル民族主義者ナルガ地方的ニ相当勢力ヲ有シ居タルニ不拘従来国家的奉祝行事ニ参加シタル例ナカリシ處南京陥落ハ実ニ痛快事ニシテ慶祝ニ堪ヘズ

ト称シ午前十時頃先シテ神社ニ参拝シ尚報告祭ニ参列シタル外祝賀宴ニ酒肴料ヲ喜捨シテ衷心慶祝ノ意ヲ表シツヽアリ[80]

自ら神社参拝をおこなった金鴻亮は，1939年に陸軍志願兵訓練所の自動車購入費2千円を献金し，1940年には紀元2600年祝典記念式と奉祝会に招待されて記念賞も受賞した。1941年には朝鮮臨戦報国団の発起人・評議員となり，黄海道地主報国会の会長として30万円の募金を集めて日本軍に「地主号」2機を献納[81]，1942年には「大東亜戦争2周年記念」として朝鮮軍愛国部に戦闘機献納基金10万円を献金した[82]。

1945年8月15日に植民地支配からの解放を迎えると，安岳の金鴻亮や金善亮，李始馥らは自治委員会を発足させて安岳警察署を接収，さらに安岳保安会を結成して，朝鮮総督府からの政権移譲に備えた[83]。朝鮮建国準備委員会の呼びかけで全国人民代表者会議がソウルで開かれ，1945年9月6日に朝鮮人民共和国の樹立が宣言されたが，アメリカは朝鮮人民共和国を認めず，朝鮮半島は北緯38度を境に南北に分断占領された。共産党が安岳の金農場を「反動地主の巣窟」と称して没収すると，金鴻亮は越南して韓国へ亡命した[84]。越南した金鴻亮は，李承晩の依頼で輔国基金実行委員会の委員長や食料対策委員会の委員，大韓経済輔国会の委員長などをつとめ，韓国経済の再建のために働いた[85]。1945年12月28日には亡命先の中国から帰国した金九・都寅権らの歓迎会をソウルの貞洞教会で開催した。1946年1月23日には金九ら安岳事件の関係者たちとともに，かつて服役した西大門刑務所を訪問している[86]。また，朝鮮の信託統治に反対し，大韓民国臨時政府の承認と自主独立を主張する3・1同志会を都寅権らとともに結成し，金鴻亮は同会の黄海道代表をつとめる[87]など，政治運動にも参与したが，朝鮮戦争勃発後の1950年7月3日に死去した。

金鴻亮は没後，安岳事件での功績などが認められて1977年に建国勲

章国民賞が授けられた。しかし，戦時中の親日行為が問題となり，2001年に叙勲が取り消された。金鴻亮の墓は国立ソウル顕忠院の愛国志士墓地にあるが，金鴻亮ら「親日派」の墓の移設を求める世論もあり，韓国の国会では国立墓地法の改正案が提出され，公聴会が開かれている。

「抗日」と「親日」の狭間で金鴻亮がどう葛藤したのか，彼の親日行為をどう分析し評価すべきなのか，今後の研究課題としたい。

謝辞

本稿を執筆するにあたって，西江大学の崔起榮教授より崔光玉に関する論文や記事をご教示いただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

註

（1） 柳周鉉，朝鮮総督府刊行会訳『朝鮮総督府』清風書房，1968年，202～203頁。

（2） 安岳郡誌編纂委員会『安岳郡誌』安岳郡民会，1976年，152～153頁。

（3） ハングルの子音字母の「ㄱ」（キヨク）のこと。

（4） 金九，梶村秀樹訳『白凡逸志―金九自叙伝』平凡社，1973年，162～163頁。

（5） 黄海道教会史発刊委員会『黄海道教会史』図書出版所望社，1995年，483～484頁。『安岳郡誌』261～262頁。

（6）『安岳郡誌』232頁。

（7） 文一平，拙訳「私の東京留学時代」『明治学院歴史資料館資料集』第8集，2011年，2頁。

（8） 岡村淑美「東アジア圏留学生名簿」『明治学院歴史資料館資料集』第8集，189～202頁。

（9） 白南薫，拙訳「私の一生」『明治学院歴史資料館資料集』第8集，87頁。

（10） 太極学会『太極学報』第25号，1908年10月，68～69頁。

（11）『太極学報』第26号，1908年11月，64頁。

(12) 白南薫，前掲書，85 ～ 87 頁。

(13) 大韓興学会『大韓興学報』第 4 号，1909 年 6 月，66 頁。

(14) 『太極学報』第 1 号，1906 年 8 月，51 頁。

(15) 同書，50 頁。

(16) 『太極学報』第 4 号，1906 年 11 月，53 頁。

(17) 『太極学報』第 2 号，1906 年 9 月，56 頁。

(18) 文一平，拙訳「私の半生」『明治学院歴史資料館資料集』第 8 集，6 頁。

(19) 『太極学報』第 13 号，1907 年 9 月，61 頁。

(20) 『太極学報』第 19 号，1908 年 3 月，58 頁。

(21) 李光洙，具末謨訳『至誠，天をうごかす―大韓民族独立運動の父 島山安昌浩の思想と生涯』現代書林，1991 年，179 ～ 180 頁。

(22) 『大極学報』第 3 号，1906 年 10 月，7 ～ 14 頁。

(23) 『太極学報』第 25 号，1908 年 10 月，21 ～ 26 頁。

(24) 『太極学報』第 20 号，1908 年 4 月，1 ～ 3 頁。

(25) 『大韓興学報』第 1 号，1909 年 3 月，78 ～ 79 頁。

(26) 島山安昌浩先生全集編纂委員会編『島山安昌浩全集』第 5 巻，島山安昌浩先生紀念事業会，2000 年，76 ～ 78 頁。

(27) 李光洙，前掲書，180 頁。

(28) 『太極学報』第 7 号，1907 年 2 月，56 ～ 57 頁。筆者私訳。

(29) JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B03041513800「統監府政況報告並雑報 1. 政況 /10 地方政況」1907 年 7 月 31 日作成（外務省外交史料館）。

(30) 大韓自強会『大韓自強会月報』第 1 号，1906 年 7 月，10 頁。

(31) 『大韓毎日申報』1906 年 3 月 31 日。

(32) 『キリスト新聞』1906 年 1 月 18 日。なおこの新聞はアンダーウッド宣教師がソウルで刊行した新聞で，明治学院でのクリスマス祝会の報告記事を崔光玉が執筆した。

(33) 『皇城新聞』1906 年 7 月 2 日。

(34) 『安岳郡誌』99 頁。

(35) 西友学会『西友』第 3 号，1907 年 2 月，169 頁。

(36) 『大韓毎日申報』1907 年 3 月 16 日。

(37) 『皇城新聞』1907 年 6 月 21 日。

(38) 『安岳郡誌』101 ～ 104 頁。

(39) 『大韓毎日申報』1909 年 6 月 25 日。

(40) 金九，前掲書，161 ～ 162 頁。

(41) 白南薫，前掲書，81 頁。

(42) 尹健次『朝鮮近代教育の思想と運動』東京大学出版会，1983年，383～384頁。

(43) 『大韓毎日申報』1908 年 8 月 26 日。

(44) 白南薫，前掲書，81 頁。

(45) 姜在彦『朝鮮近代の変革運動』明石書店，1996 年，231 頁。

(46) 『毎日大韓新報』1908 年 10 月 10 日。

(47) 『韓国独立運動史辞典』第 5 巻，韓国独立運動史研究所，2004 年，476 頁。

(48) 大韓野球協会編『韓国野球史』1999 年，102 ～ 104 頁。

(49) 姜在彦，前掲書，263 頁。

(50) 李光洙，前掲書，186 ～ 187 頁。

(51) 国友尚謙「不逞事件ニ依ッテ観タル朝鮮人」『百五人事件資料集』第 2 巻，不二出版，1986 年，120 ～ 121 頁。

(52) 尹慶老『105 人事件と新民会研究』一志社，1990 年，210 ～ 212 頁。

(53) 崔起榮「韓末崔光玉の教育活動と国権回復運動」『韓国近現代史研究』第 34 巻，韓国近現代史学会，2005 年，53 頁。

(54) 尹慶老，前掲書，212 頁。

(55) 同書，232 頁。

(56) 同書，197 頁。

(57) 朴殷植, 姜徳相訳『朝鮮独立運動の血史 1』平凡社，1972 年，74 頁。姜在彦，前掲書，243 頁など。

(58) 尹慶老，前掲書，26 頁。

(59) 金泰勲「旧韓末韓国における民族主義教育」『教育学雑誌第 23 号』日本大学，1989 年，75 頁。

(60) 李光洙，前掲書，189 ～ 190 頁。

(61) 同書，194 頁。

(62) 『大韓毎日申報』1909 年 8 月 17 日。

(63) 李光洙，前掲書，196 頁。

(64) 崔起栄，前掲書，60 頁。

(65) 白南薫，前掲書，88 ～ 89 頁。

(66) 金九，前掲書，172 ～ 173 頁。

(67) 同書，174 ～ 175 頁。

(68) 国家報勲處『独立有功者功勲録』第 1 巻，1986 年，85 頁。

(69) 「安明根強盗事件判決書」『韓民族独立運動史資料集』第 2 巻, 国史編纂委員会，1986 年，608 頁。

(70) 尹慶老, 金丙鎮訳「新民会に対する日帝の認識」『福音と世界』第 44 巻 4 号，新教出版社，1989 年，63 頁。

(71) 国友尚謙，前掲書，215 ～ 216 頁。

(72) 権寧俊「20 世紀初の中国東北地方における『朝鮮独立基地建設運動』と新興武官学校」『1920 年代から 1930 年代中国周縁エスニシティの民族覚醒と教育に関する比較研究』（科研費研究：課題番号 24320143），2015 年，78 ～ 79 頁。

(73) 同書，80 頁。

(74) 姜徳相『朝鮮独立運動の群像』青木書店，1984 年，36 頁。

(75) 『安岳郡誌』143 頁。

(76) 金相万編『東亜日報史』第 1 巻，東亜日報社，1975 年，443 頁。

(77) 『東亜日報』1928 年 11 月 17 日。

(78) 『東亜日報』1936 年 2 月 12 日。

(79) 『東亜日報』1938 年 9 月 13 日。

(80) 京城地方法院検事局文書「治安状況（昭和13年）第44報」，国史編纂委員会のデータベースより引用，http://db.history.go.kr/item/imageViewer.do?levelId = had_188_0160，2020年9月7日アクセス。

(81) 『毎日申報』1941年11月17日。

(82) 親日人名辞典編纂委員会編『親日人物辞典』民族問題研究所，2009年，703～705頁。

(83) 『安岳郡誌』304～311頁。

(84) 『安岳郡誌』218頁。

(85) 『中央新聞』1945年12月15日。

(86) 白凡金九先生全集編纂委員会編『白凡金九全集』第11巻，大韓毎日申報社，1999年，176～177頁。

(87) 『東亜日報』1946年1月21日。